2017年2月4日(土)毎日新聞に掲載！！

白洲次郎山荘 築60年

「蔵王の魅力の一つに」

「日本一かっこいい男」とも呼ばれる実業家の白洲次郎（1902～85年）が山形市蔵王温泉に建てた山荘「ヒュッテ・ヤレン」が今年、築60年となる。4日に開かれる「国際樹氷サミットin山形蔵王」で、同市の佐藤孝弘市長らが視察、懇談する。同山荘の保存・活用運動に携わるNPO法人「元気・まちネット」（東京都）の矢口正武代表理事は「蔵王温泉や山形市、県の資産として、活用方法を一緒に考えてほしい」と期待を寄せている。【猪飼順】

白洲次郎が建てた山荘「ヒュッテ・ヤレン」

国際樹氷サミット きょう視察

山荘は、白洲が東北電力の初代会長だった1957年に建てた。1階部分が玉石を積んだコンクリート製、2階部分は木造。延べ床面積は約70平方メートルとこぢんまりとしているが、1階に居間とホームバー、2階にカウンターもあるオープンキッチンのしゃれた造りだった。白洲は上手にスキーができない、ひゅーっと曲がれないという意味を込めて「ヒュッテ・ヤレン」と名付けたという。

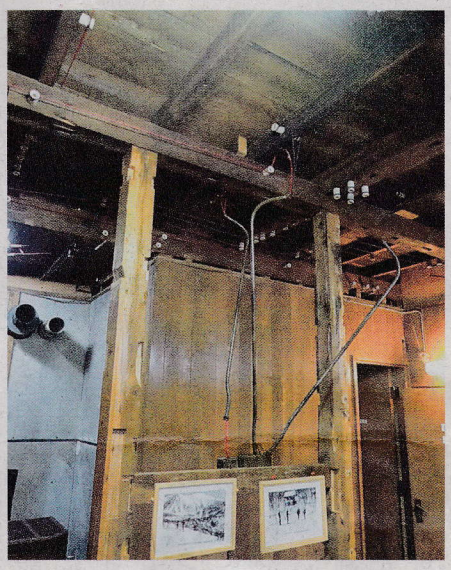
白洲は、吉田茂元首相の側近として、終戦後の占領下で連合国軍総司令部（GHQ）と渡り合った人物。

その後、山荘の所有者は代わり、しばらくはリフト管理者やスキー教室の宿舎などとして使われた。傷みが目立つようになったこともあり、白洲の足跡や思いを伝える場として活用できないかと、矢口さんらが「旧白洲次郎山荘保存・活用の会」を設立。募金への協力を呼び掛け、改修などを進めている。

白洲は蔵王を観光・保養地として知られる「サンモリッツ」（スイス）に見立てて、「東洋のサンモリッツ」にしたいと考えていたという。矢口さんは「サンモリッツのように年間を通じて楽しめる山岳リゾートとして、山荘が蔵王の魅力の一つになれば」と話す。

4日のサミットは、国内の三大樹氷エリアとされる蔵王・八甲田山・森吉山の魅力を連携して発信する。それぞれ山形・青森・北秋田の3市長が集まり、初のサミット形式で行われる。会議や交流会の後、関係者が同山荘を訪ね、親睦を深める予定だという。

山荘の2階部分の構造を説明する矢口正武さん。大きなカウンターテーブル、二重窓、外の冷気を取り入れた食品保管スペースなど、当時としては珍しい工夫が多く残っている



電線が複雑に張り巡らされた山荘の1階部分。廃材も利用して建てられた＝いずれも山形市蔵王温泉で